
書 評・紹 介

岡崎 陽一 著

『日本人口論』

古今書院, 1999年, vi + 181ページ

現在の日本で人口問題に関わる職場にいと、少子・高齢化こそが現代日本喫緊の問題だと思ふ瞬間がある。もちろん実際には重要な問題はほかにもあるし、一般の人々はこちらが思っているほど人口問題に興味があるわけでもない。ただ人口が社会の一基盤である以上、人口に関する知識をもつことは、現代の様々な問題を考える上で決して無駄にはならないだろう。『日本人口論』は、日本の人口について知るうえで、非常に有益な本である。はしがきによれば、本書はもともと『現代日本人口論』の改訂版として企画されたが、現在の日本の人口問題が、以前と大きく異なってきたため、旧著とは独立に書かれたという。内容は大学の講義ノートをもとにした、いわば人口学の教科書である。テーマは明治以降の日本の人口問題が中心だが、関連する社会保障や世界人口の状況など幅広い分野に目配りがされている。分量も多くな、全体的に読みやすく仕上がっている。

本書の内容を目次にそって見る。まず序論では日本列島成立以来の日本人口の状況が簡潔にまとめられている。次に「明治維新以降第二次大戦までの人口と人口問題」では、明治から第二次大戦までの人口の増減、年齢構造、結婚の問題などが、工業化政策や過剰人口問題、戦争の影響をふまえて述べられている。「第二次大戦後の人口と人口問題」では、戦後復興期(1945~1955年)、高度成長期(1955~1975年)、少子・高齢社会への転換期(1975年~)の各時期について、出生率、死亡率、人口移動や地域分布、労働人口の変化、家族の問題などが論じられている。とくに出生率の低下はやや詳しく扱われている。「日本人口の将来と人口政策」では将来の人口予測と、人口減少や少子・高齢化問題に対する短期的・長期的政策が紹介されている。「社会保障における給付と負担の問題」では、人口と密接に関連する社会保障について、年金、医療保健、介護保険や社会保障財政の内容が概説されている。最後に「世界人口の問題」では、世界人口の現状と資源や環境、経済との関連、人口分野での国際協力の状況についてまとめられている。

本書の特徴を述べると、第一に人口についての基礎知識が簡潔に網羅されている。一般に人口は多様な分野に関わっているので、専門のこのことのみ扱っていると教科書としては十分でない場合もある。しかしこの本の場合、そういう問題とは無縁である。第二に本書は人口問題を時間の流れにそって捉えており、現状の歴史的意味を明確にする構成がとられている。少子・高齢化への条件が、すでに高度成長期に存在したという指摘などは、基本的知識として重要だろう。第三に第二次大戦後の記述が、筆者が時折はさむ感想により面白みを増している。人口学者として長いキャリアをもつ筆者の言葉は、その時代を実際に生きた人の視点で語られている。はっきりいえば、基礎的な事実よりこうした記述のほうが興味深いぐらいである。他方、気になった部分を2点指摘すると、まず序論や章に、文章が単なる事実の羅列になっている箇所がある。とくに序論には、高校日本史の復習のような部分もあるが、こうした部分に紙数をまわすよりは、古い資料の制約にもう少しふれてほしかった。また一般に初学者はあきやすいので、グラフや図があると読みやすいようにも感じた。

本書はいわば教科書であるが、問題に対する解決策を提示している部分もかなりある。しかし若い世代にとっては、なにより、少子・高齢化の問題も含め、自分たちが歴史的・社会的におかれている状況を認識する一つの手がかりとしての意義が大きい。学生にはやや値段が高いかもしれないが、多くの読者を得ることが期待される本である。

(清水昌人)